

# 社会実験（モニターツアー）の報告

## ・モニターツアーの概要

### 1. ねらい

ワイズユースの調査によって得られた「年縞」と、地域の潜在的な「環境資源」が地域活性化においていかに活用可能であるかの可能性を探る。

「年縞」調査によって得られた成果によって、地域の自然や歴史的資源にどのような新たな価値付けや関係づけが可能かを検討し、地域活性化につなげる方向性・方策等を探る

地域の潜在的な環境資源（とりわけ地域住民によって培われてきた自然との関わりとそこにある知恵や技）に対する外部の人間の評価・反応を把握し、今後の地域活性化への活用の可能性を探るとともに、地域住民の資源への認識の変化等を把握し、内発的な地域づくりや地域活性化の取組の可能性・住民の関与の方向性等を探る。

上記のような目的を達成するため、大館市及び男鹿市において、「学び」のツアーを開催、そこでの地域資源や年縞調査についての学びを通じて、参加者と地元関係者がともに地域資源のワイズユースについて気づき、考える、意見交換する場を提供する。参加者及び地元関係者の意識及び意見等について解析し、今後のワイズユースのあり方につなげる。

### 2. 日時

3月2日（金）午後1時 ～ 3月3日（土）午後5時30分頃（秋田市発着）

### 3. 対象地

大館市（粕田集落等）、男鹿市（目潟等）

### 4. テーマ

「環境資源のワイズユース ～ あきた学びの旅」

- ・目潟から掘り出された年縞と男鹿の伝統・文化（なまはげ、菅江真澄）
- ・自然の中での生活から生まれた伝統芸能（獅子踊り、どぶろくづくりをテーマとした酒こし舞）
- ・地域の自然にはぐくまれた食文化（きりたんぼ、男鹿の伝統食等）
- ・食を通じた地域の自然・農林漁業資源への理解

### 5. 参加者

年齢	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	計	合計
男	1			1		4	6	14
女	2	1		1	4		8	

なお、一人は大館市のみ参加のため、アンケートに回答していない。

6 . 行程

3月2日(金)		
日時	訪問先等	内容
12:45 13:00	秋田県庁前集合 秋田県庁前発	大型バス1台にて
(2時間半)	移動	行程の説明 今回の実験の趣旨の説明 参加者自己紹介
15:30 ~18:00	陽気な母さんの店 (大館市)	体験型直売所の事例視察 女性たちの活動による地域資源活用 ・たんぼづくり体験(1時間~1時間30分) ・会長 田山雪江の話(30分) - 地域の食資源を活かす私たちの活動 - ・地元の食材・食文化についての学び、食を通じた地域の農林業資源への理解を深める ・つくったたんぼをみそたんぼにして試食 ・軽い夕食(中山そば)
(1時間)	移動	
18:45 ~21:00	粕田集落集会所	粕田の伝統芸能 - 獅子踊り・酒こし舞の鑑賞・体験 ・保存と復活の取組の話(準備の間に) ・獅子踊り、酒こし舞鑑賞(19:00~) ・参加者体験(以上1時間~1時間半程度) ・地域の方との懇談 (陽気な母さんの店のきりたんぼ鍋を囲んで)
(30分)	移動	
21:30	大館矢立ハイツ着	泊 温泉有り 23:00まで

3月3日(土)		
日時	訪問先等	内容
7:00 ~ 7:45	大館矢立ハイツ	朝食 大館矢立ハイツ出発
(約3時間)	移動	車窓より矢立峠の天然スギ
10:45 ~ 12:15	男鹿半島現地 (90分)	年縞の一ノ目瀉と菅江真澄の足跡 (雄山閣・山本社長の案内) ・ 一ノ目瀉、八望台(年縞がねむっていた環境をみる) ・ 三笠の松(一ノ目瀉の伝説にまつわる松) ・ 入道崎(菅江真澄の足跡、真澄みが描いた姿と今の姿)
12:15 ~ 13:15	雄山閣着 (60分)	昼食 - 男鹿の食文化体験 ・ 菅江真澄の頃の食の復原、男鹿の伝統料理(あんぷら餅、ハタハタ鮨等)
13:15 ~ 14:45	雄山閣 (90分)	年縞についての学び ・ 講師 県総合政策課 小野勇氏 菅江真澄と男鹿のかかわりについての学び ・ 講師 雄山閣 山本氏 質疑応答 意見交換(全体)
(約10分)	移動	
15:00 ~ 16:00	なまはげ館 真山伝承館 (60分)	なまはげ文化を知る ・ なまはげ館: ビデオ及び展示物(30分) ビデオ上映 15:00 ・ 伝承館: なまはげの実演(20分) 実演 15:30
(1時間半)	移動	車中で参加者の感想をきく アンケートの記入
17:30	秋田県庁前	解散

## ・モニターツアー結果報告

### 1. 体験型直売所事例視察（陽気な母さんの店）

たんぼづくり体験、田山会長の講演、たんぼ及びそばの試食を行った。

13人の参加者のうち5人の参加者が以前に陽気な母さんの店に来たことがあった。一方、6人は知らなかった。また、「きたことはなかったが内容は知っていた」と「名前はきいたことがあった」はそれぞれ1人ずつであった。

<個々の家庭や地域で違うたんぼの作り方、たんぼとだまこ餅の地域差>

秋田市及び県外出身の学生の参加者はたんぼづくりはほとんどが初体験であった。直売所のたんぼ担当者によるレクチャーを受け、楽しんだようである。

一方、大館、八峰からの参加者は自分のところと作り方の違いを感じていた。それぞれの家庭で作り方に違いがあるということが実感された。

また、八峰ではたんぼと同様にだまこ餅もよくつくるとの声に対し、大館の参加者からは、たんぼは晴れの料理でだまこ餅はふだんの食でたんぼより一段おちるという感じがあるとの声があった。地域による差もあるようである。

受け入れ側の6人全員からも、「楽しかった」という感想をいただいた。

このようなツアー受け入れに前向きな姿勢がうかがえた。

（修学旅行等でも体験ツアー受け入れ実績有り）

田山会長より、店の立ち上げの経緯や、地産地消等にかかる思いについての話を聞いた。

立ち上げに際して、行政の補助が得られなくなったとき、メンバーはやめようといわなかった。補助金を受けなかったことがかえって、収益を出さなければという意欲を高めたということであった。

また、参加者に強い印象を与えた点としては、会長のリーダーシップや経営感覚、女性のパワーといった点であった。



店のメンバーによるたんぼづくり指導



田山会長による講演

また、参加者に地元で取れた農作物等についてアンケート調査した結果、

「同じ値段なら買いたい」（5人/13人）が最も多く、次いで「通常のもの1，2割高程度まで高くても買いたい」（3人/13人）、「3割高程度まで高くても買いたい」（2人/13人）であった。

ただし、中には「中間マージンがないのになぜ高くなるのか」との意見もみられた。

## 2. 伝統芸能鑑賞・体験（粕田集落）

獅子踊り、酒こし舞の鑑賞及び体験、地域の方との交流会を行った。

参加者にとって粕田の獅子踊り・酒こし舞を鑑賞するのは初めてであった（「知らなかった」は10人/13人、「名前はきいたことがあった」は3人/13人）。

舞そのものへの感心も高かったが、若者が伝承に関わっていることに感じ入ったようであった。

（獅子踊りの踊り手3人のうち1人は小学生、1人は高校生であった）

ただし、観光化するには完成度を高める必要があるとの意見もみられた。

受け入れ側の13人全員からも、「楽しかった」という感想をいただいた。

「人との交流が楽しいので、無償で受け入れてもよい」との声が多数（11人/13人）あった。受け入れ側としても、人を呼んで舞を披露するのは初めてとのことであった。



獅子踊りの実演



地元の方との交流会

また、参加者に粕田の伝統芸能を観賞・体験できる機会についてアンケート調査した結果、13人のうち8人が「有料でも観賞+体験できる場があれば行きたい」と回答しており、その料金は「500円程度」が4人/8人、「1000円程度」が3人/8人であった。

参加者にも、地元の方との交流が楽しかったとの意見が多くみられた。

受け入れする側、される側双方にとって楽しめるイベントとなったようである。

### 3. 男鹿半島現地視察（目潟、菅江真澄の足跡等）

一ノ目潟、八望台、三笠の松、入道崎を視察した。（解説付き）

男鹿の自然の素晴らしさを再認識できたようであった。

また、八郎太郎伝説などに興味を持つ参加者も多かった。

一方、年縞について知っていた参加者はほとんどいないようであった（「知らなかった」は8人/13人、「名前はきいたことがあった」は3人/13人、「以前に詳しい話を読んだり、ゆかりの地を訪ねたことがあった」は2人/13人）。



一ノ目潟の視察

観光資源としては、目潟は少々地味ではないかという意見がみられた。

年縞についての予備知識がないので価値が伝わりにくいとの意見もあった。

#### 4. 男鹿の食文化体験

菅江真澄の頃の食を復元したもの、及び男鹿の伝統料理を味わった。

真澄に関連するエジヨロめし、伝統食のあんぷら餅、ハタハタ鮨、石焼鍋等をいただいた。

食に関しては特に主婦層が興味を持つようであった。

男鹿といえばハタハタくらいのイメージしかないので、もっと宣伝が必要との意見がみられた。



あんぷら餅

#### 5. 年縞、菅江真澄についての学び

年縞に関する講演、菅江真澄に関する講演を聞き質疑応答を行った。



年縞の講演



菅江真澄の講演

今回初めて年縞を知った参加者も多かったようである。

もっと具体的に知りたいという声もあった。

一方、年縞についての知識があれば、目濁の視察ももっと意義深いものになったかもとの声があった。

年縞は学術的であるので、単独で観光化は難しいとの意見もみられた。

雄山閣・山本氏の真澄に対する情熱に感じ入ったという声も多かった。

観光はストーリーであるので、八郎太郎伝説などどうまくからめて流れを作るべきとの意見があった。

## 6. なまはげ文化を知る

なまはげ館でのビデオ及び展示物、伝承館でのなまはげの実演を觀賞した。

特になまはげの実演が印象に残った参加者が多かったようである。

なまはげの声や音を実感できるのは貴重な体験だという意見が見られた。

実演前の解説など、観光資源としての完成度の高さを評価する声が多かった。



伝承館での実演



今回のツアー全行程の中で参加者が1番目と2番目に興味深かったものをアンケートしたところ、最も興味をもったものは「粕田集落での獅子舞や酒こし舞の観賞・体験」（「1番」は4人/13人、「2番」は3人/13人）となった。次いで興味を持ったものは「なまはげ館・伝承館でのなまはげ」（「1番」は3人/13人、「2番」は2人/13人）、「年縞の話」（「1番」は3人/13人、「2番」は1人/13人）であった。

#### その他・ツアー運営に関する意見等

アンケートにおいて、全般的に以下のような肯定的・積極的な意見が多かった。

- ・普段行けないところに行けて楽しかった。
- ・また同様の企画があったら参加したい。

なお、以下のような意見もみられた。

- ・予備知識がなかったので分かりづらいところもあった。説明不足なのではないか。
- ・バスの中で移動中にアンケートを書くのはつらい。
- ・時間がおしている感じが伝わってきた。（特に男鹿）

## ・まとめ

### <環境史・環境教育分科会関係>

#### 参加者の意見を踏まえ

- ・ 年縞についての現状での情報はどのような調査をしたかということだけなので、どのように活用可能かは今時点ではなんともいえない状況。真澄の訪れた時代の環境や、その他様々な県北でのできごとが起こった時代の環境がわかることに期待する声は大きい。
- ・ ただし、年縞はかなり専門的・学術的な感じがするので、これをどうわかりやすく観光とつなげていくかが課題と感じられるという意見も多かった。教育的な活用を中心とする、観光においても「学びのツアー」として、むしろ専門性や学術的価値の高さを売りとしていくことも重要と思われる。
- ・ 一方、ストーリー性をもった展開を考えて欲しいという意見、安田先生の講演はポイントを絞って非常にわかりやすく話されていたという感想が多く、一般観光用としては、ストーリー性をもたせる、ポイントを明確にして提示するなどの工夫が重要。
- ・ 八望台は上から見るだけのため、実感に欠ける。歩いて行って、その先にあるほうが感動を呼ぶという意見があった。一ノ目瀧は水源として利用していることなどによる制約があるが、学びのツアーなど限定的にガイドつきでの利用を展開することが適当と考えられる。

#### 現地の状況等より

- ・ 年縞をからめたゲオルト的なものの拠点としては、八望台が好適地と思われる。ただし、現ドライブインに対する対策が必要。
- ・ 拠点で学習したのち、目瀧まで歩いていくことが望まれる。その誘因として、拠点施設で、現地のライブカメラ映像を見せるといったことも重要ではないか。
- ・ 年縞に興味をもつ、知的好奇心の高い層は、目瀧の水温、水循環、生物等への関心も高い。現状でデータが十分ではないと想定され、今後の調査等が望まれる。

<産業・経済・観光分科会関係>

参加者の意見を踏まえて

- ・ 男鹿観光については、環境史と重複。なまはげの体験に対する評価は高い。解説や施設等、観光資源としての完成度が高いためといえる。
- ・ 50代の女性は食に、60代の男性は知的好奇心からロマンをもとめる、若い世代はインパクトの強い資源でないと感動が少ない、といったところがみられ、今後のマーケティングに参考となろう。
- ・ 観光において、自然の説明と資源そのものを見ることの順序については、まず説明をきいてから実物を見るほうが、より深く体験、実感できるという意見が多くきかれた。まず拠点で学習（自己学習又はレクチャー）し、そのあと現地に出て見るということが適切なルートと考えられる。
- ・ 現地の感動は、歩いて行ってその先に目標がある、というほうが大きく感じるという意見があった。これは参加者の属性や興味の度合いにもよるであろうが、歩いて行って見る、という手順をいれることで、利用者の満足も高まるとともに、所用時間が長くなり滞在型が増加する可能性がある。また、この点から、八望台の上から眺めるだけでは感動が少ないという意見が多く、目潟まで歩いていく設定が望まれる。なお、一の目潟は上水等の取水に対する配慮が必要であるが、ガイド付きのみそばまでいける、といった展開が考えられる。
- ・ 地元の農作物の購入意向については、通常の価格より高くとも購入するという意見が多かった。これは、地場産で新鮮ということに加えて顔が見える安心感、さらに有機栽培や減農薬栽培であることも暗黙のうちに期待されているのではないかと思われる。一方、実際には、陽気な母さんの店では周辺のスーパーより2割程度安い価格設定を行っているとのことであった。また、生産者の立場からしても、現在はEM菌や炭を使った栽培に取り組んでいるが、生産過程で特に労力がかかるわけではないということであった。

現地の状況等より

- ・ 陽気な母さんの店では、地場のものに加えて、京都や東京の品物がおかれている。これは、地域住民も顧客の一つの層であり、これをターゲットとしているのかと思われるが、地域外からの顧客が多い場合には興ざめとなる。かたや、他の道の駅等では、直販の野菜以外はほとんどが外部の製品で、秋田駅その他で購入可能な土産物が多い。このあたりは要検討事項である。

<環境共生型地域づくり分科会関係>

参加者の意見を踏まえて

- ・ 粕田、陽気な母さんの店とも、女性のパワーに圧倒されたという感想がきかれた。しかし、陽気な母さんの店の立ち上げに際しては、それまで農家の女性の社会参加が少ないことから、その地位向上等を意図した事業から始まっている。従来はあまり表にでてこなかった女性の力も、きっかけとこれをまとめる人がいれば大きく展開できる可能性がある。女性や高齢者などがコミュニティづくりの牽引力となる可能性は高い。
- ・ 粕田では、地元、参加者ともに交流できたことに対して評価が高く、また陽気な母さんの店でも、体験型直売所として交流を重視している。外からの刺激、外からの評価により自らの気づきや自信がより醸成されること、若者が流出する中で地域の活気が出ることなどから、必ずしも儲けることにつながらなくとも、交流の持つ意味は大きい。
- ・ 粕田での交流の中で、既に途絶えてしまった雨乞いの話を保存会代表にしてもらったところ、集落の参加者が飛び入りで歌い出した。外の人にみせる、といったことは地域住民同士のコミュニケーションを高めることにもつながるよい機会となり、埋もれた資源がさらに発掘できる可能性がある。

現地の状況等より

- ・ 陽気な母さんの店のメンバーには粕田の人はおらず、今までは交流がなかった。今後陽気な母さんの店が展開を検討しているグリーンツーリズムの中で、粕田集落の芸能との連携等をはかっていくことが期待される。（陽気な母さんの店の側からはそのような希望もでている）